

低学年における書く力を育てる指導

上越市立末広小学校 柳澤 京子

1 はじめに

2年生 11名（男子 8名 女子 3名 計 11名）の児童である。学習課題に対して意欲的に、楽しみながら取り組むことができる。しかし、注意力に欠け、指示を聞き逃したり、不注意によるミスを繰り返したりする児童が半数以上いる。

国語に関する実態は次のようであった。

- ・正しく音読することができない。
- ・朝学活のスピーチでは、昨日の出来事を順番に並べて長々と話す児童が多い。
- ・「何があったのか。」「どのようにしたのか。」など、過去の出来事を問われた時に、順を追って説明できる児童は少ない。
- ・文章の内容を理解するのに時間がかかる。
- ・文章を書くことに苦手意識をもっている。
- ・日記などを書かせると、3文程度である。

これらの実態から、次のような子どもを育てたいと考えた。

「書きたい！」「書ける！」「書けた！」を実感できる子ども

2 書く力を育てるための手立て

①実態把握

音読、視写、聴写によって、学力の基礎実態を数値で把握し、指導に生かす。

②パーツ型の授業構成

毎日の授業をパターン化（漢字→音読→本時の内容）することによって、継続した指導を行い、学力の定着を図る。

③毎日の詩の音読

音読集に毎日取り組むことにより、言語感覚を高める。

④「話す・聞く」活動との関連指導

毎日の日直スピーチでは、「はじめ - 中 - おわり」の構成を考えながら話す。全員が必ず質問することにより、聞く力、話す力を高める。

⑤「読む」学習との関連指導

説明文の文章構成を学習することにより、「はじめ - 中 - おわり」の構成に慣れさせる。

⑥一文を短く書く指導

『。』は一つ 500円玉の価値あり」と指導し、短く分かりやすい文を書く習慣を付ける。

モデルとして示した観察記録文

①→

①かぼちやのはっぱがふえてきました。たくさんありました。
 大きいはっぱと小さいはっぱがありました。
 大きいはっぱと小さいはっぱがありました。
 早くみになってほしいです。

②↓

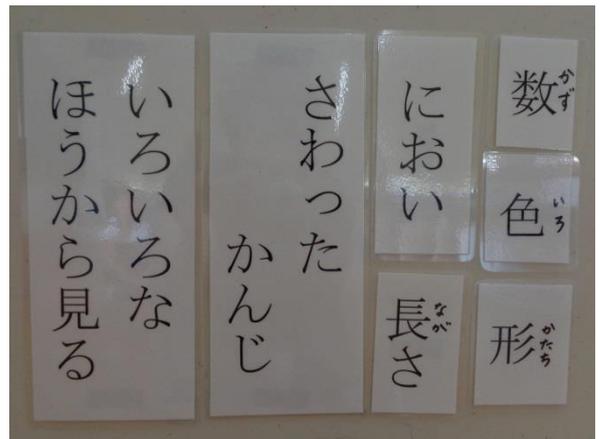
②かぼちやのはっぱがふえてきました。うえたときは四枚だったのに、きょうは十五枚でした。
 いちばん大きいはっぱは十センチメートルくらいです。
 小さいはっぱはギザギザした形です。大きいはっぱは丸い形をしています。
 はっぱの色は、こい黄みどり色でした。
 はっぱをさわったらザラザラしていました。
 においは青くさいです。
 よこから見ると、上にのびているはっぱとよこにのびているはっぱがありました。
 早くみになってほしいです。

くわしく観察するための観点を見付ける。

②の記録文には、7つの観点（数、長さ、形、色、におい、さわった感じ、様々な方向から見る）が含まれている。

始めに「数」と「様々な方向から見る」という2つの観点について、全員で確認した。その後、残りの観点を各自でプリントに丸印を付けた。

最後に、7つの観点をカードにまとめたものを提示し、全体で確認した。



写真を見ながら観察記録文を書く。

普段は、なかなか書き出すことができない児童もいる。そこで、書き出しの一文を右のように印刷し、配付した。

子どもたちは写真を見ながらはっぱの数を書き込み、観点カードを見ながら色や形について書くことができた。

しかし、写真からは長さやにおいなどについての情報を得ることができない。そこで、写真から書くことができる観点と、書くことができない観点とを全体で確認することにした。

「においは写真じゃ分からないよ。」「畑に行って本物を見て書きたい。」という声が上がった。「次の時間は畑に行って観察文の続きを書こう。」という期待感をもって本時を終えた。

						だいすっきー二のはっぱがふえてきた
						六月八日(月) 天気
						ズッキーニのはっぱがふえてきました。はっぱは、いろいろあります。
						あります。
						ズッキーニのはっぱがふえてきました。はっぱは、いろいろあります。
						ズッキーニのはっぱがふえてきました。はっぱは、いろいろあります。
						ズッキーニのはっぱがふえてきました。はっぱは、いろいろあります。
						ズッキーニのはっぱがふえてきました。はっぱは、いろいろあります。
						ズッキーニのはっぱがふえてきました。はっぱは、いろいろあります。
						ズッキーニのはっぱがふえてきました。はっぱは、いろいろあります。
						ズッキーニのはっぱがふえてきました。はっぱは、いろいろあります。

【2 時間目】

観察記録文を完成させる。

前時に書きかけたシートを持って畑に出かけた。実際にズッキーニを見た子どもたちは「思ったより大きい！」と口々に話していた。写真ではなく、実物を見て観察することの大切を実感したようだ。

実際にさわったり、ものさしで長さを測ったりしながら、次々と文を書く姿が見られた。

観点カードを見ながら、「次は形を書こう。」「まだ書いていないのは、さわった感じについてだな。」などと言いながら観察記録文を書き進めていた。

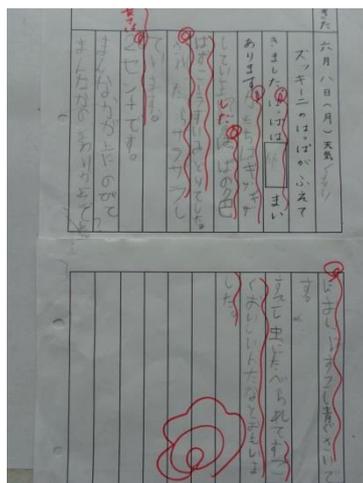
授業の終わりには、全員が5つ以上の観点について書くことができ、どの子の顔にも充実感が見られた。

その後、生活科で野菜の観察をした時にも、本時でとらえた観点に沿って、全員がくわしい観察記録文を書くことができた。

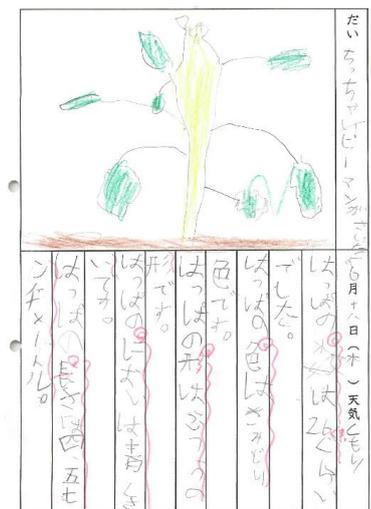
【6月18日（木）

生活科ワークシートより】

【授業後】



【授業前】



4 成果と今後の課題

- 学力の実態を把握することにより、児童に対する指導の方法を明確にすることができた。
- 「書く」活動を多く取り入れることにより、「書く」ことに対する抵抗感が確実に減っている。
- 様々な形態の文章を書く指導の中で、「たくさん書けるようになった。」「いい文が書けるようになった。」という子ども自身の達成感をもたせた。その結果、「書きたい」という意欲が育ってきている。今後は徹底的にほめることにより、さらに意欲を高めていく。
- 「書く」指導だけでなく、「話す」「読む」指導を関連させたことにより、簡単な文章構成を常に意識する姿勢が育ってきている。
- 教科書に掲載されている説明文教材は1学期に一教材程度である。文章構成を分かりやすく指導するために、1学年用の説明文教材などを使用し、学期に2回ほど指導した。
- 書き方を「教え学ばせる」作文の指導と、「楽しい」作文の指導とを継続して並行させていく。